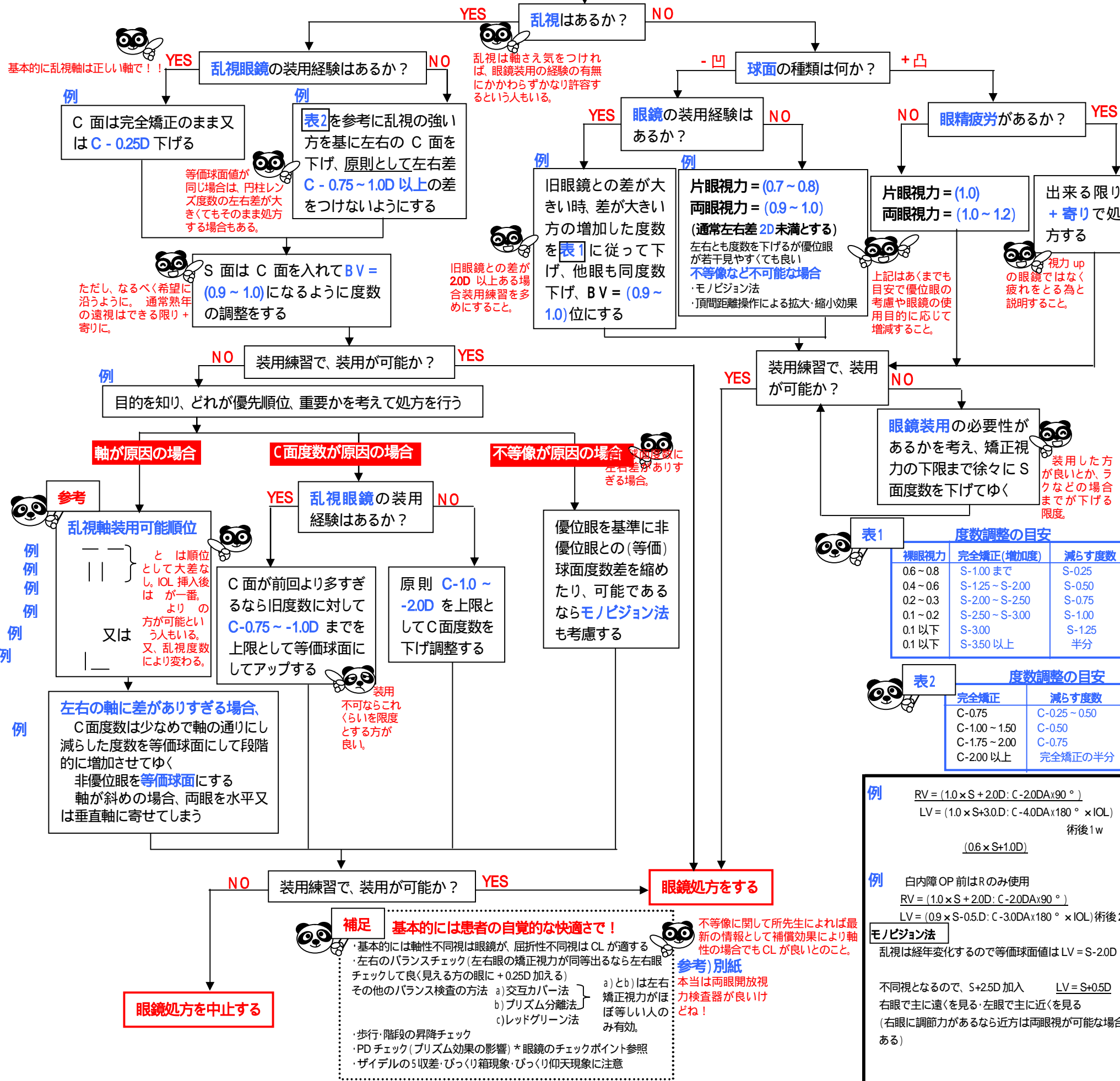


# 成人の遠用眼鏡度数決定方法例

参考)平成2年10/22 大阪視能訓練士の会の勉強会を講師 桂 考次郎先生

準備物 検眼棒・検眼レンズ・視力表

項目 11. 屈折検査-自覚的屈折検査を参考に屈折矯正検査を行う



**例** RV = (1.0 x S - 2.50) (0.7 x S - 1.75)  
LV = (1.0 x S - 2.25) (0.7 x S - 1.50)  
BV = (0.9 ~ 1.0p)

**例** RV = (0.6 x JB)  
LV = (0.2 x JB)

眼鏡度数 R: S-1.0D  
L: S-1.0D

RV = (1.0 x S - 2.50) (0.9 x S - 1.75)  
LV = (1.0 x S - 3.00) (0.9 x S - 2.25)  
BV = (0.9 ~ 1.0p)

**例** 完全矯正 R: C-2.00D Ax90°  
L: C-2.25D Ax85°  
旧眼鏡 R: C-1.00D Ax85°  
L: C-1.25D Ax100°

一挙に完全矯正すると違和感があるので、C-0.25D 減じて R: C-1.75D Ax90°  
L: C-2.00D Ax85°

装用練習で不可ならば、両眼Ax90°にする。  
最終的には、色々試して自覚的に快適なものにする

**例** R: C-1.0D Ax90°  
L: C-1.0D Ax90°

網膜 空間視

背が高くなったように見える (床が遠くに見える)

**例** R: C-1.0D Ax180°  
L: C-1.0D Ax180°

網膜 空間視

背が低くなったように見える (床が近くに見える)

**例** R: C-1.0D Ax135°  
L: C-1.0D Ax135°

網膜 空間視

床が左下がりに見える(右上がり) 壁が左に傾いて見える

**例** R: C-1.0D Ax45°  
L: C-1.0D Ax45°

網膜 空間視

床が右下がりに見える(左上り) 壁が右に傾いて見える

**例** R: C-1.0D Ax135°  
L: C-1.0D Ax135°

網膜 空間視

床が前上がりに見える 壁の下方が手前倒れに見える

**例** R: C-1.0D Ax135°  
L: C-1.0D Ax45°

網膜 空間視

床が前下がりに見える 壁が上方が前へ倒れて見える

**例** RV = (1.0 x S + 2.0D)  
LV = (1.0 x S + 3.0D; C-4.0DAx90°)  
(0.8 x S + 2.5D; C-3.0DAx90°)  
(0.7 x S + 2.0D; C-2.0DAx90°)  
(0.6 x S + 1.5D; C-1.0DAx90°)  
(0.5 x S + 1.0D)

装用 OK

**例** RV = (1.0 x S + 1.0D; C-2.0DAx180°)  
LV = (1.0 x S + 1.5D; C-2.0DAx90°)

年齢は? (乱視は直倒へ移行)  
日常視の状態は? (遠近の優位眼・視力差・眼球偏位)  
所持眼鏡は? 眼精疲労は? 眼鏡目的は?

12歳まで 出来るだけ完全矯正

12歳~中年まで 段階的にUP 等価球面で低矯正の乱視を左右に入れ

RV = (0.6 x S + 0.25D; C-0.5DAx180°)  
LV = (0.7 x S + 0.75D; C-0.5DAx90°)

半年後 R: S + 0.75D; C-1.25DAx180°  
L: S + 1.25D; C-1.25DAx90°

半年後 完全矯正値に

50歳以上 乱視の経年変化(倒乱視化)を考慮して 左眼重視 R: S ± 0.0D  
L: S + 1.5D; C-2.0DAx90°

若者で運転用 右眼重視で左眼等価球面値 R: S + 1.0D; C-2.0DAx180°  
L: S + 0.5D

# 眼鏡のバランスチェック法



目的

眼鏡処方時、左右の焦点を同位置にし、調節刺激を左右対称にして快適な眼鏡装用にする方法

遠点

参考

YES 矯正視力が左右ほぼ等しいか？ NO

## a) 交互カバー法

自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S + 0.5D** を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、最高矯正視力よりもやや大きめの視標を見せ、左右眼を交互にカバーする。

1番(右眼)と2番(左眼)ではどちらがはっきり見えるかを尋ね、左右のボケ具合が同等になるまで良く見える方の眼に**プラスレンズ**の度数を加える。

両眼が同等になったら、両眼同時に **0.25D** ずつ最高視力がでるまでプラス度数を減らしてゆく。

注意！！

基底上方に装用した眼の視標は下に見えるよ！この場合、どうしても上下の視標をFで見ようとして上下に動いて Hering が動くので必ず中央を見ているように指示すること。

しかし、プラスレンズを多く加え過ぎないこと。時には良く見えない方の眼にマイナスレンズが必要な場合もある。

この欠点として左右のボケ具合を同時に比較できない。斜位があると視標が動く。

## b) プリズム分離法



パンダの考えとして、この検査を行うのはかなり難しいと思うけど...

自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S + 0.5D** を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、ボケた状態でも読み取ることが出来る程度の大きさの1行の文字視標を見せ、読ませる。(R・G法で行う場合もあり)

左右の眼前に同量の**プリズム**、一般的には一方に**4 基底上方**、他方に**4 基底下方**を加え、視標がダブって見えているか確認する。

被検者に上下どちらの視標がハッキリと見えるかを尋ね、両眼が同等に見えるまで、良く見える方の眼に **+ 0.25D** 位ずつ加えてゆく。

両眼が同等に見えたなら、片眼ずつ交代に **+ 0.25D** 加えて見え方に差が出るかを見て、バランスの最終確認をする。どうしても視力が同等にならないければ、差の少ない方を選ぶ。

**プリズム**ははずし、視標が1つに見えるかを確認し、**-**の場合は最弱度数の最高視力、**+**の場合は最強度数の最高視力が得られるまで、両眼同時に **0.25D** ずつプラス度数を減らしてゆく。



理論上、近視よりのもので、赤がはっきり見えるはずだね。

## c) レッドグリーン法

自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S + 0.5D ~ + 0.75D** 程度を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、**赤地**の視標がはっきり見えるかを確認する。

片眼を遮閉し、**赤**と**緑**のどちらがはっきり見えるかを尋ね、**赤**と**緑地**が同じ程度に見えるまで **0.25D** ずつプラス度数を減らしてゆか、又はマイナス度数を加えてゆく。

他眼も同様に行なう。

再度、最初に行なった眼にもどり、**赤**と**緑地**が同じかを確認する。

両眼にし、左右同時に球面調整を行い、**+**の場合は最高度数の最高視力を、**-**の場合は最弱度の最高視力を得る。

その値から眼鏡装用可能度数まで左右それぞれ同度数下げる